

# 研究紀要

## 第20号

- 土器類の産地推定についての基礎的検討 大屋道則
- 方形周溝墓と土器Ⅲ 福田 聖
- 東国の古墳時代中期土器と韓半島系土器 坂野和信
- 官衙の門、居宅の門 田中広明
- 埋蔵文化財データベースの作成について 大屋道則 新屋雅明 橋本 勉
- 収蔵石製品の鋳物名の同定(1) 清水慎也 大屋道則

2005

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1-5-muscovite

×1.5



2-10-muscovite



3-16-quartz・muscovite



4-9-quartz・pyrophyllite



5-12-pyrophyllite

×1.5



8-15-pyrophyllite



6-27-pyrophyllite

×1.5



7-11-pyrophyllite

×1.5



9-25-talc



10-28-talc



15-21-talc



11-3-talc



12-4-talc



16-13-talc



13-1-talc



14-14-talc



17-2-talc



18-26-actinolite



19-23-antigorite



20-22-clinocllore



21-17-jadeite



27-8-jadeite



22-6-jadeite

×1.5



23-19-jadeite



24-20-jadeite



25-18-jadeite



26-24-jadeite



28-7-jadeite

# 目次

口絵

序

〔論文〕

土器類の産地推定についての基礎的検討

—理論的背景の整備と研究史的課題の明確化—

.....大屋 道則 (1)

方形周溝墓と土器Ⅲ —概観 その2— .....福田 聖 (57)

東国の古墳時代中期土器と韓半島系土器

—地域社会の形成と韓半島系土器群の系譜— .....坂野 和信 (77)

官衙の門、居宅の門 .....田中 広明 (103)

埋蔵文化財データベースの作成について

—遺物属性とカラー画像についての大規模データベース作成の実務—

.....大屋道則 新屋雅明 橋本 勉 (115)

収蔵石製品の鉱物名の同定 (1)

—平行ビーム法を利用したX線回折による非破壊での鉱物の同定—

.....清水慎也 大屋道則 (131)

# 方形周溝墓と土器Ⅲ

—概観 その2—

福田 聖

**要旨** 弥生時代後期前半の周溝墓は、平面形態では中期後半から継続する四隅切れのものがみられる地域と、それ以外の形態のものが多くなる地域があり、対照的である。それは、また四隅切れがほとんど見られない後期後半への過渡的な様相と見ることできる。こうした過渡的な様相に対して、土器棺墓とともに墓域を構成する遺跡が大部分であることは、この時期の特徴的な墓域のあり方と考えられる。一方、土器の取り扱いについては、対照的な様相は見られず、中期前半から継続する周溝底に置かれる（納められる）方法と、中期後半から始まる周溝埋没後に土器を置く使用方法が一般的である。また、埋没途中で置かれる場合も多く見られ、いっそうの複雑化が進んでいる。また同一の群中でも周溝墓の規模、土器を使用した行為の格差が広がる。日高遺跡では大型壺が使用されるものも見られ、後期後半に向かってこのような差異がどのように推移するのかが問題である。

## 1 はじめに

我々の前に土の中から検出される方形周溝墓は、遺構としての様々な要素、出土遺物の様々な様相が絡まりあい複合体として各々のものが現存している。特に底部穿孔土器に代表される出土土器の検討は、遺物として最も安定していることから、執り行われた死者儀礼の道具立てとして、その方法を知る有力な手がかりになると考えられる。しかし、その検討が進んでいるとは言いがたいのも事実である。

そこで私は前稿「方形周溝墓と土器Ⅱ」（福田2004、以下Ⅱとする）において、これまでの出土土器の検討方法を確認し、まず関東地方全体で現在知られている資料から出土土器についてどのようなことが見通しとしていえるのか確かめることにし、Ⅱでは弥生時代中期について取り扱った。

本稿は、その続編であり、弥生時代後期前半について取り扱う。

既にⅡで述べたように、検討に当たっては土器のみではなく、時期的、地域的な差異を直接反映する可能性が高い周溝墓の平面形態や群構成についても

取り扱った。この両要素が出土土器の様相とどのように関係するかも地域性の検討に重要な視点を提供すると予想されるからである。

なお、本稿では時期区分として、遺構の性格上細分した時期区分を用いず、『関東の方形周溝墓』（山岸1996）で用いた、「Ⅰ期－弥生時代中期中葉、Ⅱ期－弥生時代中期後葉、Ⅲ期－弥生時代後期、Ⅳ期－弥生時代終末・古墳時代初頭、Ⅴ期－古墳時代前期」という時期区分を使用する。

## 2 弥生時代中期までの様相

Ⅱでは、第Ⅰ期、第Ⅱ期の様相について概観した。第Ⅲ期の様相について述べる前に、比較のために第Ⅰ－Ⅱ期の内容をもう一度掲げておく。

第Ⅰ期の周溝墓については、以下のような様相を確認した。

「周溝の平面形態はいずれも四隅切れだが、中里遺跡の周溝が比較的細く、直線的な溝状であるのに対して、常代遺跡と小敷田遺跡の例は長楕円形の土坑状である。群構成は、規模の大小のあるものが組

み合わせで大きな群を形成している中里、常代遺跡の例に対して、小敷田遺跡は単発的、独立的な分布を示している。3遺跡とも出土する遺構としない遺構があり、一つブロックの中で、規模の大小の組み合わせと合わせて遺物の多寡による組み合わせが認められる。

また、常代・小敷田遺跡では、方形周溝墓と時期を同じくする土坑墓と考えられる土坑が多く検出されているが、中里遺跡では認められない。土器の扱われ方については、中里、常代、小敷田のいずれでも、周溝底面に置かれる場合があり、特に常代・小敷田両遺跡の出土状況は再葬墓の出土状況を髣髴とさせるものである。先の周溝の形態と合わせて、再葬墓を強く意識している感が強い。この他に、中里遺跡では、周溝埋没開始後に入れられる場合、壺棺として使用される場合、小敷田遺跡では、周溝底で破砕される場合、方台部で使用されたものが流れ込む場合があり、土器の使用方法が当初から複雑であることが分かる。」(福田2004 p.153・122-34)

第Ⅱ期の周溝墓については以下のような様相を確認した。

「周溝の平面形態は基本的に四隅切れだが、少数ながらコーナーのあるものが含まれている。周溝そのものは、概して細い溝状のものになるが、常代遺跡、前中西遺跡等のように幅広のⅠ期からの継続性を感じさせるものもある。群構成は、Ⅰ期から継続して規模の大小のあるものが組み合わせで大きな群を形成している常代遺跡の例、同様に列状の群構成を呈する歳勝土遺跡の例に対して、前中西、代正寺、明花向、赤羽台といった熊谷扇状地から武蔵野台地北部の地域は、単発的、独立的な展開を見せ、群の中における大小の規模の格差は不明瞭である。各々の遺跡では、Ⅰ期同様に土器が出土する遺構としない遺構があり、一つブロックの中で、規模の大小

の組み合わせと合わせて遺物の多寡による組み合わせが認められる。土器の扱われ方については、いずれの遺跡でも周溝底面に置かれた(納められた)場合が認められ、基本的な方法であったことが分かる。また、破砕される場合や、方台部から流れ込む場合があり、基本的にⅠ期の方法を踏襲しているようである。歳勝土、常代、代正寺の3遺跡では、周溝埋没終了直前(上層)に置かれる方法がとられている。この方法はこの段階から始まる可能性がある。一方、器種構成では、壺が卓越している歳勝土、常代遺跡に対して、それ以外の遺跡では壺も多く出土し、儀礼執行時における道具立てが若干異なる可能性がある。

このように平面形態では、Ⅰ期同様に常代、前中西の幅広のものとそれ以外、群構成においては歳勝土、常代とそれ以外という対照的な様相が認められた。土器の取り扱いについては、周溝底に土器を納める方法が一般的なものと認められ、これに歳勝土、常代、代正寺の3遺跡では、周溝埋没終了直前(上層)に置かれる方法が加わる。Ⅰ期の使用方法を踏襲する部分と新たな方法が導入された部分がある。」(福田2004 p.160・116-24、p.162・11-11)

こうした第Ⅱ期までの様相と、第Ⅲ期とでは何が同じで、何が異なるのであろうか。Ⅱの小結では第Ⅲ期の前半まで同様の様相が認められると書いたが、実際はどうであるのかみていこう。

### 3 弥生時代後期の地域と問題

Ⅱでも述べたように、検討に入る前に、資料を選別する前提となる弥生・古墳時代、特に弥生時代の地域がどのようにとらえられているかを確認し、合わせて本稿で扱う後期前半については特に大きな問題があることから、その点についても述べておきたい。Ⅱでは弥生時代後期の地域性について次のよう

に述べた。

「考古学において地域性を代表させる遺物として用いられるのは土器である。それは、土器が持つ最も一般的で消耗品であるという性質による。本稿はそういった土器のみでは見えてこない不動産的で保守的な地域性を考えようというものだが、作業の連続性としては既に知られている土器分布圏を用いるのが妥当であろう。

弥生時代後期については比田井克仁氏が長年の研究の結果として示した土器分布圏が尊重されるべきものであろう(比田井1993)。氏は、関東・東北地方南部を「(1) 縄文を多用する東北地方、(2) 縄文を帯状に施文する東海地方東部と南関東地方、(3) 櫛描文を用いる中部高地地方と北関東地方、という特徴をもつ土器の三つの分布圏がそれぞれの南限と東限で一堂に集合する地域」(同 p.357・16~9)と評価し、更にこれらの重なり合いとして5つの分布圏を示している。「(1) 縄文を多用し、磨消縄文やヘラ描沈線で文様を構成する、天王山系土器群が分布する東北南部、越後、会津、(2) 縄文を多用するが、加えて櫛描文も盛行する、東中根式、十王台式が分布する東関東北部、(3) 縄文を多用するが、そのほかこれといった文様をもたない上福吉式、印磨手賀沼系土器様式(印出式)が分布する東関東南部、(4) 櫛描文が主体となる榑式、岩鼻式が分布する北関東、(5) 縄文を帯状に施文する西相模様式、南武蔵様式、房総様式で構成される南関東」(同p.357・12~17)がそれである。(Ⅱ第7図)(福田2004 p.143・14~8、p.144・11~15、p.145・11)

これをもっと一般的に示したのが、中村倉司・宮瀧交二氏である(中村・宮瀧1994)。「東海系縄目文様土器群分布圏」、「中部高地系櫛描文系土器群」、「南東北系縄目文様土器群」、「在地系粗粒縄目文様土器群」という用語自体に各土器群が密接に関係す

る系統関係を表現し、弥生時代後期の関東地方が各地と密接な関係を保ちながらその結節点として位置づけられることを示している。(Ⅱ第8図)

以上の各氏の後期に関する各氏の地域設定はおおむね重なり合うといってもいいだろう。」(福田2004 p.145・14~10)

しかし、ここに大きな問題がある。それは、弥生時代後期前半には空白期があることである。大宮台地と西相模地域においては、長らくこの問題は解決されていない。現在においても、中期末と考えられる土器群と後期の最も古いと考えられる土器群に系譜的連続性が感じられず、ヒアタスがあることが知られている。

この問題のヒントとして、及川良彦氏が検討した弥生時代中期から古墳時代までに至る千葉県君津市常代遺跡(及川2003)、大宮台地西側の荒川低地に臨む鴨川の自然堤防上に立地する土屋下遺跡(笹森・山口1994)のような低地に立地する集落の存在がある。集落の立地が中期とは全く異なるという可能性である。筆者も、平成16年度に担当した都幾川の自然堤防上に立地する埼玉県東松山市城敷遺跡で、岩鼻2式(註1)とされる土器棺墓を調査する機会を得、高更その思いを強くした。

現在知られている資料を検討する中で、もし仮に特定の立地の資料のみを取り上げているのであれば、それらに共通した特徴が得られるだろうが、逆に知られていない空白の資料が時間的な前後とのつながり、地域的なつながりに当たるミッシングリンクであるならば、資料間の齟齬のような情報が得られるはずである。

本稿はⅡの作業を続けるのが目的であるが、この問題についても何らかの発見があるのではないかと考えている。「空白」とはどのような「空白」なのだろうか。そういった問題も含めて、以下、各資料

の様相についてみることにしたい。

#### 4 第Ⅱ期の様相

Ⅱ期に関東地方全域で導入された周溝墓は、Ⅲ期にはほとんど分布がみられなかった群馬県域でも展開するようになる。Ⅲ期では前半と後半の様相が大きく異なる。前半ではⅡ期と同様の地域、遺跡で継続して造営されるものが多いが、後半には同じ流域の別の箇所に変更して大集落を展開し、それに付随する形で周溝墓が展開する場合が見られる。ここでは、前半、後半に分けて様相をみることにしたい。

前半の例としては横浜市受地だい山遺跡（橋本1986）、千葉県袖ヶ浦市境遺跡（小沢1985）、東京都大田区田園調布南遺跡（新里1992）、群馬県高崎市日高遺跡（大江1982）、埼玉県熊谷市前中西遺跡（吉野2003）、東松山市代正寺遺跡（鈴木1991）を取り上げる。（第1～8図）

平面形 I・Ⅱ期をととして基本的な平面形態であった四隅切れのものに加えて、Ⅱ期に少数ながら認められたコーナーがある平面形態のものが増え、遺跡によっては四隅切れが見られない場合もある。

受地だいやま遺跡では、1号周溝墓で南側を除く3つの隅が切れている。2号周溝墓は2辺のみの検出である。周溝は細く、断面形は逆台形である。

Ⅱ期から継続すると考えられる境遺跡では、四隅切れのもの10基、同辺の二隅が切れるもの5基、対角の二隅が切れるもの2基、一隅のみが切れるもの4基が混在している。周溝の平面形は全体的に幅が狭く、細長くなっており、第Ⅰ期からの流れはこの時点で途絶えるものと思われる。

同様にⅡ期から継続する前中西、代正寺遺跡はいずれも四隅切れのものである。周溝は前者がⅡ期同様やや太めで、後者は細い。

田園調布南遺跡では、全体の形態が分かるのは1

号のみで、一隅が切れる形のものである。他の周溝墓もコーナーが認められ、四隅切れの形態のものは含まれないことも考えられる。

日高遺跡では、四隅切れのもの3基が検出されている。周溝は細く、全体的に浅めである。

このように、代正寺以北の地域では四隅切れであるのに対して、それ以南では他の形態のものが相当数増えつつあるようである。

周溝の平面形態は前中西遺跡をのぞき、いずれも細長い形態のものである。

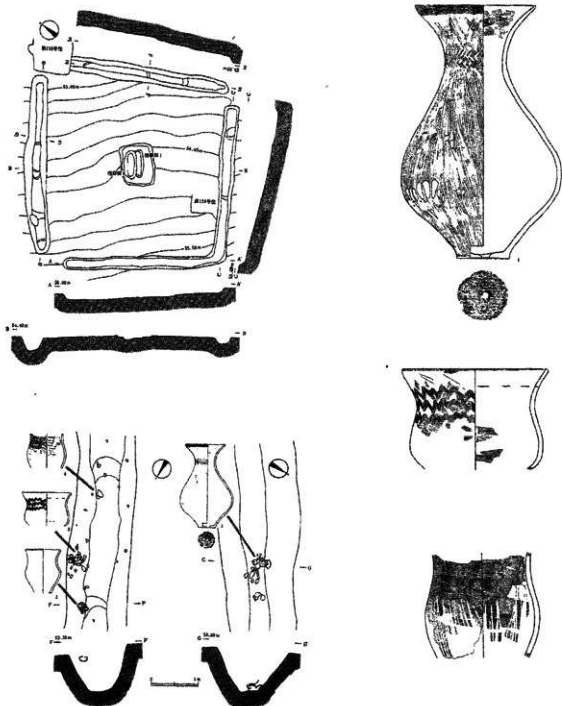
群構成 受地だいやま遺跡では、2基の周溝墓と2基の土壇墓が検出されている。周溝墓は斜面のほぼ同一のコンタ上にあり、谷を囲むように離れて分布している。土壇墓（701・702号土坑）はその斜面下方に2基分布する。報告書では、1号周溝墓→土壇墓→2号周溝墓という構築順序が考えられている。

境遺跡ではⅡ期から継続する周溝墓が18基検出されている。四隅切れのものと同コーナーの一つが切れる形態のものがあり、軸方向から大きく瀬名型（松井1992）の展開を見せる北東の四隅切れの一群と、列状に展開するそれ以外の一群に分けられる。後者では、四隅切れ、二隅切れ、一隅切れのもの混在して群を構成し、どちらかといえば四隅切れのもの小規模な傾向がある。

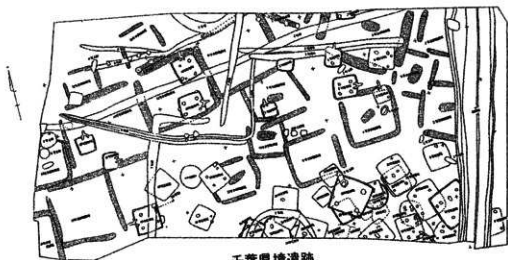
田園調布南遺跡では、5基の方形周溝墓が検出されているが、方形周溝墓群の北端を調査した形になっており、全体が調査された1号と他の周溝墓との関係は不明である。周溝墓群に接して、住居跡が検出されていることから、居住域に接した南側に墓域を造営したと考えられる。1号の東側には後程述べるように、土器棺墓と考えられる土器が単独で検出されており、周溝墓群の中に土器棺墓が造られている可能性が高い。

日高遺跡では、居住域の水田を挟んだ西側の台地

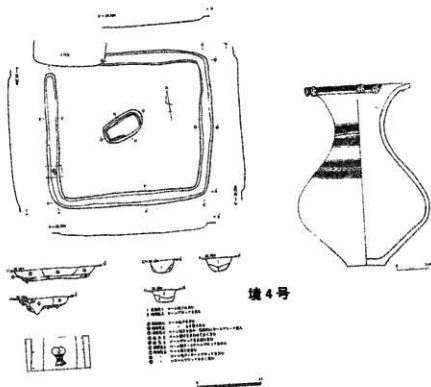




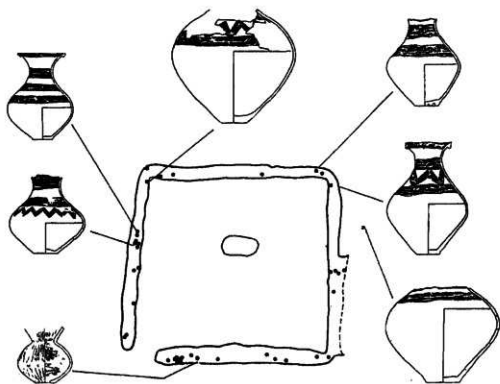
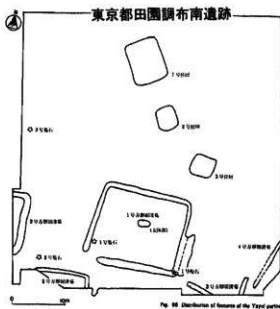
第1図 受地だいやま遺跡1号周溝墓 (橋本1986より転載)



千葉県境遺跡

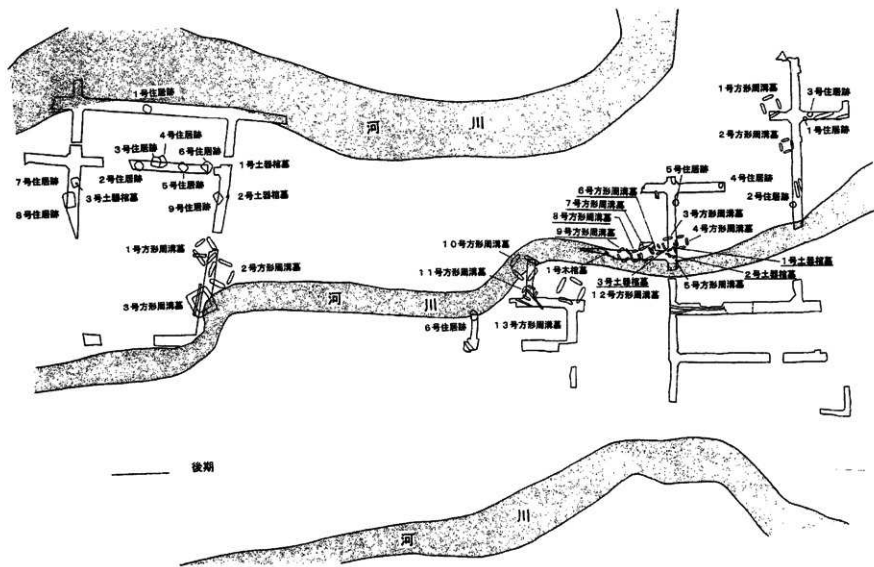


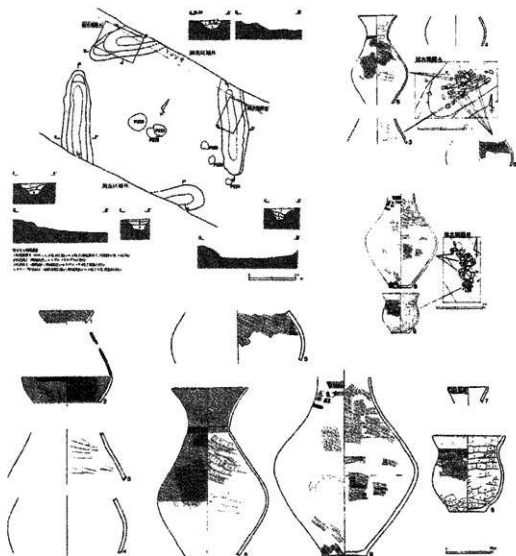
第2図 境遺跡全体図と4号周溝墓 (小沢1985より転載)



第3図 田園調布南遺跡全体図と1号周溝墓（新里ほか1992より転載）

第4図 南中西遺跡全体図（松岡2004上）(縮小)





第5図 前中西遺跡9号周溝墓 (吉野2003より転載)

中央に方形周溝墓3基が検出されている。大型の1号を基点に、南溝を共有する形で2号が造られ、更にそのコーナー方向に3号が造られている。

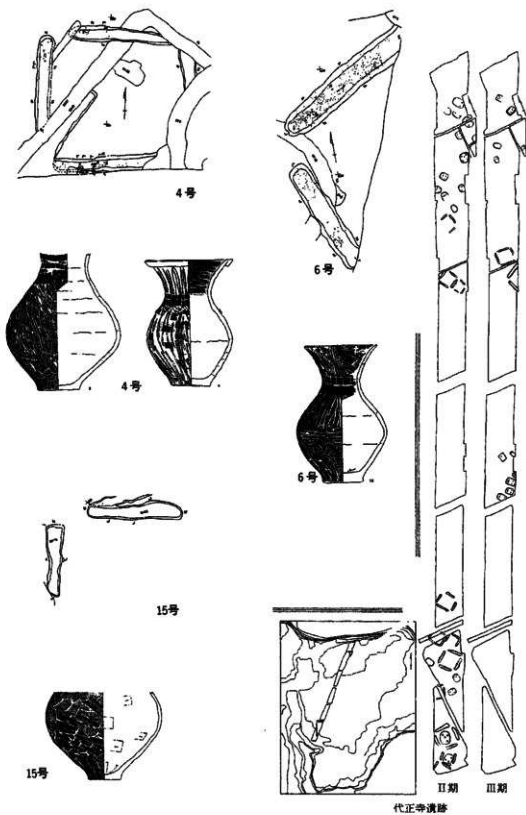
また、周溝墓群の北側には土器棺墓が2基検出されている。

前中西遺跡では、Ⅱ期から継続して集落が営まれ、自然堤防の東側に後期の方形周溝墓群8基と土器棺墓3基が検出されている。調査が部分的であるため明確でないが、東西に3～4基程度を単位とし、列状に展開していると考えられる。土器棺墓は群中の周溝墓のコーナーの外側に造られている。松岡有希

子氏も指摘するように、Ⅱ期から継続して、自然堤防上を移動しながら集落域に接して墓域を形成していると考えられる。

代正寺遺跡では、Ⅱ期から継続して墓域が造営されており、後期の4・6号の関係を見る限りでは2～3基を単位としているように見受けられる。また15号は更に南に展開する一群がある可能性を感じさせる。

以上のように、大小の規模のものがまとまった群を形成している境遺跡の例に対して、それ以外の遺跡では、2～3基の群を一つの単位として造営が行



第6図 代正寺遺跡全体図と周溝墓 (鈴木1991、山川1996より転載)

われている。後者はⅡ期には個々の周溝墓同士ほぼ同規模であったものが多かったが、受地だいやまや日高では大小の較差が明瞭で、この時期からの変化とも考えられる。

また、境遺跡、代正寺遺跡を除き、各々の遺跡が土器棺墓とともに墓域を形成している。このような構成はⅡ期では前中西遺跡で見られるが、前中西の例も土器棺はその前段階の北島遺跡同様の居住域に接したものであった。この段階の特徴的な墓域の構成と書いていいだろう。

**土器の出土状況** 受地だいやま遺跡では1号周溝墓の中心埋葬施設から、ガラス小玉182点、碧玉製管玉1点、鉄銅破片が出土している。この出土状況については、過去に検討したことがある(福田1996)。

田園調布南遺跡では、第1号周溝墓の中心埋葬施設から、ガラス小玉8点、切子玉3点、鉄石英製管玉4点、カオリン製管玉4点が出土している。埋葬施設の東側から集中して出土し、頭位が東側であったと推定されている。

日高遺跡では、第1号周溝墓の中心埋葬施設から、大形壺1点が出土している。

受地だいやま遺跡1号周溝墓からは、壺1点、甕3点、鉢1点が出土している。壺は北西溝の中央、溝底から5~10cmほど浮いて、割れた状態で出土している。底面に焼成後の穿孔が外側から施されている。甕は北東溝の上層から並んだ状態で出土し、内1点は破砕された状態である。鉢は北西溝の西寄りの上層から出土している。2号周溝墓では、南東溝の南端、底面から10cmほど浮いた状態で出土している。

このように受地だいやま遺跡では土器の扱われ方に、周溝底面付近に置かれた(納められた)場合、埋没終了直前に置かれた場合、埋没終了直前に破砕された場合という3者があるのが分かる。壺は焼成

後穿孔が施されているが、Ⅱで述べたような穿孔と同様のものと考えられ、周溝墓の底部穿孔土器と位置付けられるか疑問である。

境遺跡では7基で中心埋葬施設が確認されている。7号周溝墓では中心埋葬施設の掘り込みそのものは検出されていないが、方台部中央からガラス小玉21点が出上している。

境遺跡では、18基中4基で完形に近い土器が出土している。図示した4号周溝墓は、西溝の南西コーナー寄りの底面から20cm浮いて、横倒しの状態で壺が出土している。底部が打ち欠かれて離れた状態である。周溝埋没直前あるいはそれに近い時点で周溝内に置かれたものと考えられる。10号では東溝中央の底面から壺が倒立した状態で出土し、周溝底面に置かれた(納められた)ものと考えられる。16号では東溝南側の上層から、壺が破砕された状態で出土している。このように境遺跡では、土器の扱われ方に、周溝底面に置かれた(納められた)場合、埋没終了直前に置かれた場合、埋没途上で破砕された場合という3者があるのが分かる。

田園調布南遺跡では、5基中3基で完形に近い土器が出土している。図示した第1号周溝墓からは、壺16点、甕3点、小型壺1点、鉢1点が出土している。出土位置が示されているものは完形に近いもののみで、北東、北西の各コーナー、西溝中央、南溝の陸橋部際、東溝の周溝外からである。西溝の2・3は、溝底から若干浮いて土圧で潰れた状態で出土し、周溝掘削後程無く入れられた(納められた)ものと考えられる。北西コーナーからは大型の壺5が周溝内側の上層より出土し、方台部から転落した、あるいは立てられたものである可能性もある。北東コーナーからは、4の壺が周溝外側の上層から、1の壺が周溝内側の覆土中層から出土している。前者はその遺存状況から、周溝埋没完了直前に置かれた

(立てられた)と考えられる。口縁部は意識的に欠かれたような印象を受け、後に述べる6の遺存状況と考え合わせると、あるいは土器棺である可能性もある。後者は転倒、あるいはその場で潰れた状態で出土しており、周溝埋没途中で置かれた(納められた)と考えられるが、報告者の菅原氏が述べるように、周溝の中層まで埋め戻しにより底面を作り出している様相が認められることから、この土器も溝底出土のものと同様に扱えるものと考えられる。覆土に含まれる焼土と出土土器との関係は不明だが、南溝の焼土形成と前後する時点で周溝に入れられたものと考えられる。南溝の陸橋部際の上層からは焼成後穿孔の小型壺が出土している。周溝埋没完了直前に置かれた(立てられた)のであろうか。しかし、一般的にはあまり穿孔が施される器種ではなく、しかも他の出土土器と時期的な齟齬があるように感じられるため、例外的なもの可能性もある。東側周溝の外側からは口縁部を欠いた6と胴部下半のみの7が出土している。報告書の斎木ひろみ氏が指摘されているように、土器棺である可能性が高い。また南溝では北壁が比熱し、覆土の底面直上に焼土層が形成されている。先の土器の出土状況との直接の関係は不明である。

このように第1号周溝墓においては、周溝底面に置かれた(納められた)もの、中層の造られた周溝底に置かれたもの、周溝埋没終了直前に入れられたという3者があるのが分かる。

ここで、報告者の菅原道氏は、1号周溝墓の出土状況について次のようにまとめているので見ておきたい。

まず、氏は次の各点について確認する。

1. 西、南溝に顕著な底面の造営が認められた。
2. 南溝北側壁が被熱している。
3. 溝内出土土器は、底面造営面と溝確認面

付近のものに分かれ、底面造営面より下位では出土していない。

4. 東南コーナー部分の2層上面から1号配石が検出された。(p.43・112, p.44・114)

そして「これら4点は、方形周溝墓の利用という観点から、第1次利用に関するもの(1、2)、第2次利用に関するもの(3、4)と分けて考え」(p.44・15・6)、それぞれについて評価を行っている。

1は溝の成形に伴うもの。

2は、「底面造営→火を利用した儀礼行為」という方形周溝墓の第1次利用の痕跡」。

3については、時間差があり、両者を分けて考える。

4の礫は被熱しており、他から持ちこまれた。

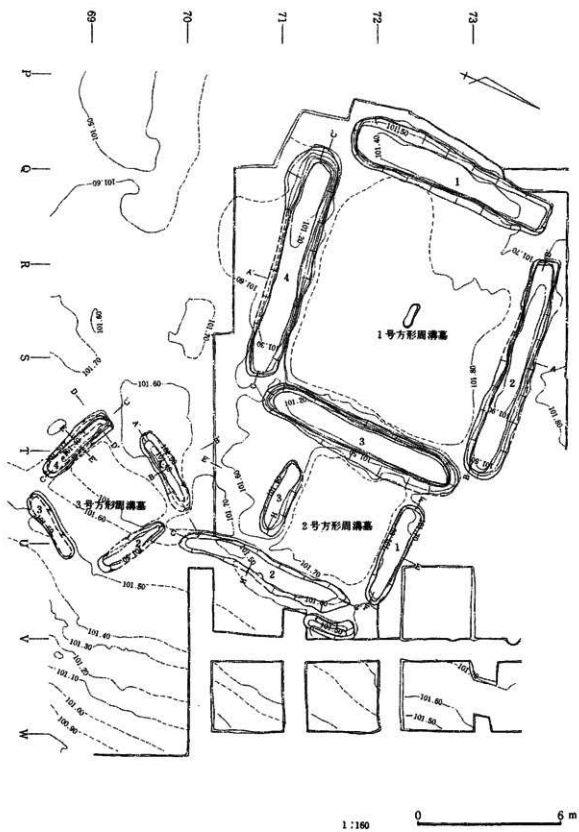
そして、これら1～4は「方形周溝墓の構築→1次利用→溝埋没→2次利用」(p.45・110)という方形周溝墓の儀礼行為に伴うものであるとしている。こうした所見をもとに、1号周溝墓の構築から儀礼までの5段階が考えられている。

- 1 溝荒掘、
- 2 溝成型(底面造営)、
- ? (主体部構築)、
- 3 A1次儀礼行為A、
- 3 A1次儀礼行為B(溝被熱)、
- ? (主体部埋葬)、
- 4 溝埋没、
- 5 A2次儀礼行為A、
- 5 B2次儀礼行為B、
- 5 C2次儀礼行為C(1号配石)

こうした評価や段階の指定は尊重されるべきものであるが、その是非についての判断は、今少し他の事例を検討してから行うことにしたい。

2号周溝墓からは壺が3点出土し、この内全体の器形が知られる2点の出土位置が図示されている。





第7图 日高遺跡周溝墓全体图 (大江1982より転載)

底部穿孔のものは北西コーナーの下層から横転した状態で、東溝中央のものも下層から横転した状態で出土している。周溝埋没途中に置かれたものと考えられる。3号周溝墓は西溝のみから土器が出土している。全体の器形が知られるものは、周溝南端の陸橋部際の下層から出土しており、周溝掘削後間もなく置かれた（納められた）可能性がある。

このように田園調布南境遺跡では、土器の扱われ方に、周溝底面に置かれた（納められた）場合、埋没途中で置かれた場合、埋没終了直前に置かれた場合、という3者があるのが分かる。特に第1号周溝墓ではそのいずれもが確認されており、中心埋葬施設からの玉類の出土も、この周溝墓が他から抜きん出ていることを示している。

前中西遺跡では、いずれの周溝墓からも破片ではあるが土器の出土がみられる。図示した9号周溝墓からは全体の器形の知れる壺2、甕1が出土している。北溝からは壺が西側の上層から他の壺の破片とともに土圧で潰れた状態で、東溝中央の上層からは壺と甕がやはり潰れた状態で出土している。周溝埋没直前に立てられたものと考えられる。

代正寺遺跡では、3～6号、9～11、13・15号周溝墓から多くの土器が出土している。この内Ⅱ期のものは3・5・9～11・13号、Ⅲ期のものは4・6・15号である。各々の出土状況については既に検討したことがある。（福田1995）詳細はそちらを参照願いたい。4号周溝墓では壺4、甕2、手捏ね1が出土しているが、壺2点と手捏ねを除き、ほとんどが小破片である。南溝西側の底面から浮いた状態で壺2点が2つに割れて横転して出土している。鈴木氏は方台部からの転落と推定している。両者とも破損状態がよく似ており、Ⅱ期にも埋没途中で破砕されたものが見られたことから、あるいは割って周溝に納めた可能性もある。6号周溝墓では壺13点が

出土しているが、全体の器形が知られるのは1点のみで、他は小破片である。破片は覆土中から万遍なく出土している。壺は北溝の溝底からやや浮いて横転した状態で出土している。周溝掘削直後に入れられた（納められた）と考えられる。15号周溝墓では、壺1個体が北東溝の西陸橋部際から出土している。詳細は不明である。代正寺遺跡では、土器の扱われ方に、周溝底面に置かれた（納められた）場合、方台部方向に置かれたものが転落した場合、あるいは周溝埋没途中に割って入れられた場合という2もしくは3とおりの扱い方が分かる。

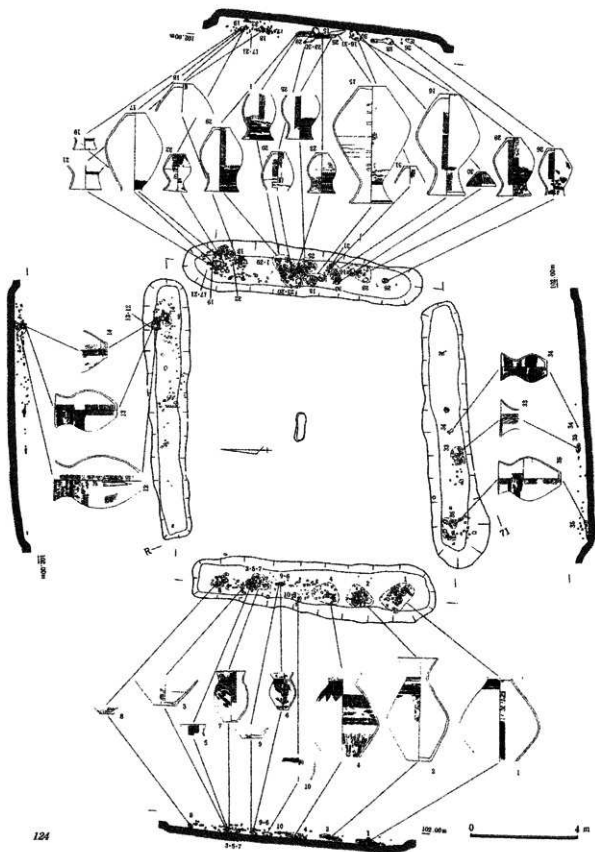
日高遺跡では、いずれの周溝墓からも土器が出土している。

1号周溝墓では、35個体の全体の形が知れる壺・甕・鉢が出土している。土器の出土状況については、報告書で詳述されているので引用したい。

1溝については次のように記されている。「溝の南より土器No 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10などの大壺・壺・甕（中略）などが出土している。このうち、構築面に接した例と、上方の黒褐色土に接した例があり、1・4・7・8・10が前者で、2は後者である。

遺物の分布は外縁側に近く、遺物納置の旧状が示唆される。C軽石降下直前の状態は1・2・4などが黒褐色粘性土から突き出て、他の個体も部分的に顔を覗かせていた。」（p.126・13～7）と推定されている。

2溝については次のように記されている。「出土遺物は、第75図の石製垂れ飾りが、検出面の台上部側溝際から出土し、発見面の高さからして、主体部からの移動が示唆される。出土土器は溝の東より、第82図12・13・14、第81図41・42があり、4溝と同様に個体量は少ない。12・13・14、の3点は、底面に接し、特に12は倒れかかって出土し、正位に置か



第8図 日高遺跡1号周溝墓 (大江1982より転載)

れたか、正位に置かれたものが上方より緩やかに落ちた状況が考えうる。また全体の遺物分布は溝の外縁側に近い。」(p.130・112～16)

3 溝については次のように記されている。「出土遺物は溝の南より、土器№15・16・17・18・20・21・23・25・26・27・28・29・30・31・32と続き、別に第89図43～56がある。このうち16・21・32を除き全体的に10cm余り構築面より離れており、1溝とは様相が異なっていた。15・17などは倒れかかった状態で出土し、正位に置かれたか、あるいは正位に置かれていたものが上方より緩やかに落ちた状況が考えうる。遺物分布は外縁側に近く、各溝と同様の傾向がある。また溝中から15cm前後の川原石が数点出土し、土器の納置に安定を計るため使用したとの考え方が出されたが結論は得られなかった。」(p.138・11～6)

4 溝については次のように記されている。「出土遺物は、溝の東より土器№34・33・35があり、第90図57～59が出土している。出土量は2溝と同様に少なく、2溝に共通する。出土位置は、比較的古い様相をおびる壺35が底面に接し、33・34は10cm余り離れた状態で出土している。34は傾いた状態であり、溝中に正位に置かれたとすれば、封土の崩落により逆向きに倒れても良いと考えられ、上方からの流入が示唆される。」(p.138・115～18)

この出土状況については、整理時の所見を加味して大江氏が以下のように評価している。

「土器納置・供献のあり方は、調査時点において封土上に置かれたものが溝中に落下したのか、溝中に存在したのか結論づけることができなかつたが、報告書刊行のための整理中、いくつかの傾向が明らかとなった。

まず①接合関係は、広域に飛び散った様子はなく、総てが近接した接合関係にある。但し第73図(本稿

第8図：福田註)は移動の可能性のある埋土上層から出土した一群は含んでいない。出土状態のうち、土器№2・12・13・15・17・34などは、納置時に完形であったらしく、完器に近い状態か、完器であったのが自然に割れたことを彷彿とさせる出土状態にあった。また他の個体も人為か、自然の力が加わった場合に破片が比較的大形で、紐作り成りに多くが割れており、そう強い力の作用が加わって割れたとは思えない。そのため全部ではないにしろ、破砕でない納置がなされたことは確かである。

②分布状態は、どの溝をとっても、方台部に接する側は、15・20・23があるが、それを除けば外縁に近い側に土器分布がある。その状態は仮りに大半を溝中に樹立させたとすれば、方台部側に近接して出土しても良いはずであるが、その例は究めて少ない。

樹立させたときの溝の埋没土との関係であるが、標準⑨に当るC軽石層の効果年代が、既設のとおり4世紀であったとすれば小溝でありながら埋没はそう早くないと考えられ、樹立された土器の大半が外側に向かって移動したとは考え難い。③は1溝において、土器№1・4・7・10、3溝において15・30・32が底面に接して破片分布を認めることができるが、他は少なからず構築面から離れて出土しているため、後例は前例と異なる別時元の所作の作用の在り方である。以上の諸点に整合性を持たせることができるのは、封土縁辺に土器の樹立がなされた時である。樹立された土器が溝中に落下、流入したとすれば①～③の問題は解消される。(大江1982 p.139・16～12、p.140・11～9)

このように大江氏は、出土状況の由来となる土器の使用方法を、方台部際に樹立したという一元的な状況に還元しようとする。もちろん、報告者の見解は尊重されるべきものであるが、逆にこの複雑な状況を一つの使用方法に押し込めてしまうことのほう

が無理があるのではないだろうか。例えば、1・4・7・8・10（1溝）、12・13・14（2溝）、16・31・32（3溝）、35（4溝）はいずれも底面に接して出土しており、12・13・15・17・34は完形に近い。やはり、こういった状況は大江氏が①で述べているように、納置、置かれた（納められた）と考えるほうが無理がないのではないだろうか。また、外縁に近い分布状況を方台部からの転落によるものとしているが、外寄りに置かれたのではないとする根拠にはならないのではないだろうか。③も、むしろ周溝埋没途中の行為の結果と考えた方が無理がないと考えられる。

従って、日高遺跡1号周溝墓の土器群は、複数回の行為の結果としてとらえられ、周溝底に置かれた（納められた）、周溝の埋没途中に置かれたという2段階があったと考えられる。

2号周溝墓からは、16個体の全体の形が知れる壺・甕・高坏が出土している。

1溝では溝底から僅かに浮いて出土している。

2溝では、確認面直下からまともな状態で、周溝のやや外縁よりから出土している。

3溝では、溝底から20cmほど浮いて、同溝の西側から出土している。

1号周溝墓同様に、大江氏は整理時の所見を加味して以下のように評価している。

「土器の分布は、1号方形周溝墓と同様に方台部側よりも外側に多く偏っており、さらに接合関係はいずれも近接し、飛散した状況はなかった。そのことと埋土との関連は、仮りに溝中の埋土中に地山ブロックの流入があれば封土の存在が決め手となり、土器がそれに伴っていたか否かを類推すれば、ある程度示唆が得られる筈である。しかし各溝とも浅いため調査時点で、土器が封土上に置かれたものか、溝中に存在したものかあるいは両者の形があったの

か結論づけることはできなかった。」(p.146・117～22)

仮に1溝の状況を、周溝掘削後ほどなく置かれた（納められた）状態、2・3溝の状態を周溝埋没途中で土器を入れたものとするこもできるが、ここでは報告者の見解を尊重したい。従って、土器を使用した何らかの行為が行われたことを確認するに留める。

3号周溝墓からは、図示可能な壺と高坏の2個体が出土している。壺は3溝の中央下層から出土し、高坏は4溝の南側中央から出土している。出土状況図や写真が示されておらず、詳細は不明である。

以上のように、日高遺跡においては、1号周溝墓で、周溝底に置かれる（納められる）、周溝の埋没途中に置かれるという2段階の行為が認められ、2号周溝墓でも同様の行為が行われていた可能性あることを確認できた。

また、日高遺跡においては、規模と土器の出土量が対応しており、規模の大きな1号で器形の知れるものが32個体と抜き出ている。同じ群を構成する中でも、規模や出土量に大きな差異が見られるようになると考えていいだろう。

同様に1号周溝墓では、1溝と3溝で大中小の3種類の法量の壺、甕が使用されているのに対して、2号では大型壺が1個体で、他は中形と小形、3号は小形のもののみである。道具立てにおいても、規模に対応した差異が見られるようである。

ここで第Ⅲ期の様相についてまとめておきたい。

全体の周溝の平面形態は、代正寺以北の地域では四隅切れであるのに対して、それ以南では他の形態のものが相当数ある。

周溝は前中西をのぞき、いずれも細長い形態のものである。

全体の平面形態や、周溝の形に関しては、第Ⅰ期から継続していたあり方が、大きく変わりつつある

ようである。

群構成では、大きな群を形成している境遺跡の例と、2～3基の単発的な群を形成するそれ以外という第Ⅱ期同様の対照的な様相が窺える。その一方で、いずれの墓域でも大小の組み合わせが認められる。後者の単発的な墓域が、Ⅱ期には大小の差がないものであったのに対して、第Ⅲ期から大小の規模があるものが多くなる。

また、土器棺墓と墓域を構成するという特徴的なあり方が広く見られる点は注意しておく必要がある。この時期には、例えば埼玉県東松山市周辺では土器棺墓群のみの墓域も見られ(註2)、方形周溝墓と土器棺墓の関係がこの時期を特徴付けるものである可能性もある。

特にⅡ期から継続して墓域を形成している境遺跡において土器棺墓との併存が認められない点は、その群構成のあり方が静岡県域の瀬名型(松井1992)と共通であることから、両者の関係性を示すものであると同時に、土器棺墓と群を構成するそれ以外の地域の遺跡は、境遺跡とは異なる交流関係を他の地域と持っていたと考えることもできる。

土器の扱われ方については、前中西遺跡を除き、いずれの遺跡でも、周溝底面に置かれる(納められる)方法が認められる。また、確認面の問題もあるが、受地だいやま、境、田園調布南、前中西の各遺跡で、周溝埋没直前に置かれる場合が認められ、周溝の埋没途中でも受地だいやま、前中西以外では土器が置かれる場合や破砕される場合が認められるなど、周溝埋没の各段階における土器を使用する行為が一般的に執り行われていたことが分かる。第Ⅱ期から見られる周溝埋没直前に置かれる場合に加えて、埋没途中にも土器を使用した行為が認められることから、よりいっそう土器使用行為の複雑化が進んだといえよう。

また、同一群中でもこうした3段階全ての行為が行われるものもあれば、全く行われないものもある点は注意が必要である。この点は第Ⅰ期から認められる土器の、同一群内における出土量の多寡とも表裏一体のものだが、田園調布南遺跡や日高遺跡のようにその差が大きくなるのは第Ⅲ期から顕著になると思われる。

日高遺跡においては、大型壺の使用や大中小の組み合わせといった道具立てそのものも異なるようで、大きな差異といえるだろう。

また、田園調布南では土器棺の可能性があるものもあり、先の土器棺墓と墓域を構成する点からも、周溝墓と土器棺墓との密接な関係を予想させるものである。

以上のように、第Ⅲ期の周溝墓は、平面形態では、代正寺、前中西、日高の四隅切れと、他の遺跡のそれ以外という対照性がみられる一方、群構成においては境とそれ以外という対照性が見られる。また、同一群内における規模の大小が明瞭となり、前中西遺跡以外では周溝は概して細めである。

逆に土器の扱われ方では、各遺跡ともそれほど差は見られないが、出土量の多寡、土器使用行為の段階の差が広がるのが特徴的である。

#### 4 小 結

第Ⅲ期の周溝墓は、平面形態では第Ⅱ期の四隅切れが継続する地域と、それ以外の形態が多くなる地域があり、過渡期的な様相を感じさせる。それは、周溝の形態そのものでも同様で、幅が狭い例が多い。

一方、群構成においては土器棺墓と墓域を構成するものが多いという点が、この時期の特徴とも捉えられる。

土器の取り扱いについては、第Ⅱ期から継続して、周溝底に土器を納める方法が一般的なものと認めら

れ、第Ⅱ期から加わった周溝埋没終了直前（上層）に置かれる方法も一般的に見られる。また、周溝埋没途中にも土器使用行為が認められ、第Ⅱ期の使用方法を踏襲する部分と新たな方法が導入された部分があり、いっそう複雑化が進んでいる。

Ⅱでは第Ⅲ期の前半までは第Ⅱ期と基本的に同様の遺跡立地、群構成、土器の取り扱いが継続すると予想していたが、それほど単純ではないようである。

これらの様相は、第Ⅱ期同様に土器の分布圏と異なる部分もあり、当時の地域性が単に一つの文化要素で語り得るほど単純でないことを示している。

一方で、同一群内における規模の格差や、土器使用行為の回数に大きく違いが見られるようになる。特に日高遺跡で見られる大型壺の使用は、第Ⅲ期後半に見られる大型壺の使用（註3）の先駆的なものとも考えられる。こうした様相が階層的な格差につながるのかは、第Ⅲ期後半以降にどのような形で継続するのかによるものと思われ、今後の大きな問題である。

また、田園調布南で検出された集石は、神奈川県平塚市大庭城址公園内遺跡方形周溝墓SD09（加藤・山上1991）で、壺、甕、高坏、ミニチュアの36個体の土器片とともに出土した大量の焼けた礫を思い起こさせるものである。両者の間には時期差があるが、系譜関係が認めうるのか今後の課題となろう。

ところで、3であげた「空白」について何か手がかりは得られただろうか。

土器の取り扱いにそれほど差がないのであれば、

むしろ南北で対照的な平面形や、土器棺墓との関係が鍵になると思われる。特に土器棺墓と墓域を構成するあり方は、第Ⅲ期後半では樽・吉ヶ谷式の分布圏地域を除いて継続しない。この時期だけの、現在知られている資料の特徴的なあり方なのである。片や瀬名型の群構成をとる遺跡がある。この両者の温度差が「空白」と考えられる。従って、現在知られていない資料が存在する可能性は充分にある。

翻って、そうであるならば充実した資料が知られている第Ⅲ期後半との継続性はいかになものだろうか。なぜ資料が充実しているのかを含めて更なる検討が必要だろう。後考を期する次第である。

（2005年6月20日記）

#### 謝辞

本稿を草するにあたり、後期前半の様相について、柿沼幹夫、宅間清公、菊地（松岡）有希子、的野善行、中山浩彦の各氏にご教示いただいた。また、日高遺跡の様相について、小泉範明氏からご教示いただいた。中村倉司氏からは文献の提供を受けた。いつものように、方形周溝墓研究会の諸兄からも多くの教唆を頂いている。図版の作成に当たっては、小笠原朝代、新井さとみの両氏にご協力いただいた。また、本稿のもととなる発表資料の作成に当たって福田恵子の協力を得た。以上の方々に、末筆ながら感謝申し上げる次第である。

最後に、本稿を新たな職場に旅立つ渡辺慎太郎氏への贈にさせていただきます。

#### 注釈

1. 岩鼻式については、宅間清公、菊地有希子両氏にご教示いただいた。
2. 岩鼻遺跡等で見られる。宮島秀夫、江原昌俊両氏ご教示。岩鼻遺跡、八幡遺跡、観音寺遺跡で認められる。報告書は未刊である。
3. 例えば、埼玉県さいたま市井沼方遺跡や、富士見市北通遺跡、神奈川県海老名市本郷遺跡等で見られる。

## 引用・参考文献

- 相草達史 1986 『群馬県の方形周溝墓』『関東の方形周溝墓』pp.153～164 同成社
- 伊丹 徹 1986 『神奈川県内の方形周溝墓』『関東の方形周溝墓』pp.97～120 同成社
- 伊藤敏行 1986 『東京湾西岸流域における方形周溝墓の基礎的研究』『研究論集Ⅳ』pp.43～89 東京都埋蔵文化財センター
- 伊藤敏行 1988 『東京湾西岸流域における方形周溝墓の基礎的研究』『研究論集Ⅵ』pp.1～69 東京都埋蔵文化財センター
- 伊藤敏行 1996 『群構成論』『関東の方形周溝墓』pp.331～347 同成社
- 伊藤敏行 1996 『個別形態論』『関東の方形周溝墓』pp.365～375 同成社
- 伊藤敏行・及川良彦 1996 『東京都の方形周溝墓』『関東の方形周溝墓』pp.57～74 同成社
- 大江正行 1982 『日高遺跡』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 小沢 洋 1985 『境遺跡』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第8集 財団法人君津郡市文化財センター
- 及川良彦 1996 『方形周溝墓』出土の土器 南関東②東京都『関東の方形周溝墓』pp.209～228 同成社
- 及川良彦 2003 『関東地方の低地遺跡の再評価 (4) 一常代遺跡群の評価を基として』『西相模考古第12号』pp.72～102 西相模考古学研究会
- 加藤信夫・山上英誓 1991 『大庭城址公園内遺跡発掘調査報告書』大庭城址公園整備事業区内埋蔵文化財発掘調査会
- 神沼幹夫 1996 『方形周溝墓』出土の土器 北関東①埼玉県『関東の方形周溝墓』pp.247～318 同成社
- 君津郡市文化財センター 1996 『研究紀要Ⅵ』財団法人君津郡市文化財センター
- 群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会 1988 『東日本の弥生墓制』北武蔵古代文化研究会
- 森繁紀巴子・山口康行 1994 『土屋下遺跡』大宮市遺跡調査会報告第47集 大宮市遺跡調査会
- 鈴木孝之 1991 『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 立花 実 1996 『方形周溝墓』出土の土器 南関東①神奈川県『関東の方形周溝墓』pp.179～208 同成社
- 中村倉司・宮滝文二 1994 『検証 関東の弥生文化』埼玉県立博物館
- 新里 泰・菅原 道・齋木ひろみ他 1992 『田園調布南』都立学校遺跡調査会
- 橋本裕行他 1986 『奈良地区遺跡群Ⅰ上巻 発掘調査報告(第2分冊) No.11地点 受地だいやま遺跡』奈良地区遺跡調査会
- 比田井克仁 2003 『関東・東北地方南部の土器』『考古資料大観 土器Ⅱ』pp.357～368 小学館
- 福田 聖 1995 『方形周溝墓と土器Ⅰ』『研究紀要第11号』pp.1～54 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1996 『方形周溝墓の死者儀礼』『関東の方形周溝墓』pp.395～412 同成社
- 2000 『方形周溝墓の再発見』同成社
- 松井一明 1992 『静岡県における中期方形周溝墓の出現過程について』『宇佐八幡境内遺跡』pp.28～39 袋井市教育委員会
- 松岡有希子 2004 『北島式と集落』『北島式土器とその時代—弥生時代の新展開—』pp.47～68 埼玉考古学会
- 山川守男・坂本和俊・福田 聖 1986 『埼玉県の方形周溝墓』『関東の方形周溝墓』pp.97～120 同成社
- 山岸良二・甲斐博幸・諸馬知義 1986 『千葉県内の方形周溝墓』『関東の方形周溝墓』pp.75～96 同成社
- 山岸良二(編) 1996 『関東の方形周溝墓』同成社
- 吉野 健 2003 『前中西遺跡Ⅲ』平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会



研究紀要 第20号

2005

平成17年7月22日 印刷

平成17年7月29日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里町船木台4-4-1

電話 0493-39-3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷 株式会社太陽美術